みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

執筆したもの

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横川, 公子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001441

横川公子・笹原亮二編『モノに見る生活文化とその時代に関する研究』
国立民族学博物館調査報告　68:73-78(2007)

執筆したもの

横川　公子

大村しげの全執筆記録については，巻末に収録している。それによれば，印刷物になったものは，1952（昭和27）年6月（33歳）から2002（平成14）年までの47年間にわたるものが含まれ，合計652件を数えることができる。但しコレクションには，1999（平成11）年3月の没後，印刷され，出版されたものが7件含まれている。これらは関係者によって加えられたものである。なおコレクションには，執筆時期が不明の著述が24件含まれるが，内容を検討すれば，生前の著作であることはわかり，さらに，他の著作との関連で印刷・出版のおおよその時期を推定できるものと思われるが，本稿ではそこまで検討していない。ここでは，大村しげの執筆した，新聞記事や商品のチラシなどを含む多様な印刷物と出版物を取りあげる。

コレクションに含まれる大村しげの文章は，1952（昭和27）年『婦人朝日』に投稿し，入選した「財産」[1] が印刷物のうち最も古いものとして知られ，最後の文章は，絶筆となった1999（平成11）年7月の秋山十三子氏への追悼文[2] である。さらにコレクションには，小学校時代の作文のうち，ガリ版刷りの文集に載せられた以下の2件が発見されている[3]。大村しげが5年生の時に転校した日彰小学校には，1930～31（昭和5～6）年にかけての文集『日彰』10号，11号があり，それぞれ俳句10句，「冬の朝」という作文が載せられている。また同じく日彰小学校の1930～31（昭和5～6）年にかけての文集『あさみどり』1～3号にも，それぞれひとつずつ計3本の作文が選抜され掲載されている。さらに京都女子専門学校時代のガリ版印刷による『こだま』誌上にも，擬古文調の詩や西洋の翻訳詩に想を得たと思われる叙情的な詩が載せられている[4]。これらは，大村しげが，既に小学校や女子専門学校の頃から文章による表現行動に関心があり，学校現場における上手な作文の書き手であったことが窺え，興味深い。

絶筆以後の著作としては，再版されたものや遺志を受け継ぐ形で関係者がとりまとめ，出版された著作がさらに3件遺されている。

以下では，コレクションに含まれるしげの著作を，主に資料の形態と題目，刊行の時期などに着目して，紹介したい。なおコレクションには，一般的な本として世界文学全集38冊と日本文学全集63冊が含まれるが，これらは大村しげの著述とは関連しないため，ここでは扱わない。しかし，単純な量的把握によれば，出版物のほとんどが大村しげ執筆あるいはインタビューに応えたものであり，このことがまず特徴として指摘できる。

これらのことから，大村しげの執筆のスタイルが窺える。出版物の内容構成は，自

身でも「格別に調べて書くことはない，身近な経験をそのまま書いているだけ」（大村　1988：3）と書き残したのと符合している。文献を渉猟した跡がないのである。調査するために必要となるであろう資料としての蔵書が皆無であった。もっとも文献以外の参考にしたと思われる資料がある。大村しげが，古老に問い合わせした質問に応えたらしいハガキや京都の手作りの店やたべもの屋のチラシやメニュー，寺社や京都周辺の観光地のパンフレットやチケットの半券などが残されており，文献によらない聞き書きや見聞に拠り所を置いた執筆スタイルであったことが窺えるのである[5)]。

以下，資料の形態別に執筆したものを概観する。

① 本

執筆された本は，以下のように単著が合計 20 冊である。

大村しげ

1974『京の手づくり』東京：講談社。
1976『静かな京』東京：講談社。
1980『京の台所 京のくらしうた』東京：冬樹社。
1980『冬の台所』東京：冬樹社。
1980『大村しげの京のおばんざい 暮しの設計 133 号』，東京：中央公論社。
1984『京都 火と水と』東京：冬樹社。
1985『京 台所の詩』京都：淡交社。
1986『京の精進料理 妙心寺東林院の四季の味わい 暮しの設計 172 号』，東京：中央公論社。
1987『美味しいもんばなし』東京：鎌倉書房。
1987『京暮し』東京：暮しの手帖社。
1988『京 暮らしの彩り』東京：佼成出版社。
1989『こんこんさん遊びまひょ 京のあそびうた』東京：筑摩書房。
1993『しまつとぜいたくの間 ゆたかな暮らしのエコロジー』東京：佼成出版社。
1995『ヘルシーな京の精進料理』東京：中央公論社。
1996『車椅子の目線で 京都・バリ島，暮らしの旅』東京：佼成出版社。
1996『ハートランドバリ島村ぐらし』京都：淡交社。
1996『京のおばんざい』東京：中央公論社。
1997『アユとビビ　京おんなのバリ島』東京：新潮社。
1997『ほっこり京ぐらし』京都：淡交社。
1999『京都・バリ島車椅子往来』東京：中央公論新社。

以上 20 冊のほか，共著や執筆分担の随筆集その他多数の著作がある。共編著は以

下のようなものである。

秋山十三子・大村しげ・平山千鶴

1966『おばんざい　京の味ごよみ』神戸：中外書房。

1973『だれも書かなかった京都』東京：主婦と生活社。

1974『京の女ごよみ〈あんなあへえ〉』京都：白川書院。

1974『京の着だおれ　京女がつづる着物への愛』京都：東洋文化社。

1977『おばんざい　京の台所歳時記』東京：現代企画室。

1977『詳細地図つき　とっておきの京都』東京：主婦と生活社。

2002『京のおばんざい　四季の味ごよみ』京都：光村推古書院。

大村しげ・土村清治

1985『大村しげの妙心寺精進料理案内』月刊婦人誌マミール（編集制作）東京：佼成出版社。

1988『京の禅寺と精進料理』東京：佼成出版社。

大村しげ・西川玄房

1995『ヘルシーな京の精進料理』東京：中央公論社。

「おばんざい」系統の料理の本が，秋山･平山･大村共著の最初のものを含めて10冊を数え，共著や執筆分担でも「食べ物」関連の内容が少なくない。

これらの単著・共編著の出版物の半分以上は，「おばんざい」以外の暮らしの随想であるが，テーマ別では「食べ物」に関する内容がもっとも多く，「おばんざい」の大村しげといわれる理由が出版物の構成によって証明されている。

② 雑誌記事

雑誌記事には，1950年代前半から投書家として投稿した文章と，その後の求めに応じて執筆した文章がある。

前者については，『婦人朝日』の投稿欄「私の作文」への入選文があり（1952・昭和27年6月），これが大村しげの物書きの端緒になる。同人誌『私の作文』は，『婦人朝日』の「私の作文」[6] コーナーへの投稿者によって発展的に結成された，婦人朝日ペンシル会，のちに改称して婦人ペンシル会によって編集された作文集である。大村しげは，その中心的なメンバーで，編集・発行などの推進役を担った。途中で，同じく婦人朝日ペンシル会，発行人・大村重子によって発行された『同人だより』も含めると，しげの著作は33件含まれる。1965（昭和40）年11月20日発行の『私の作文』101号への投稿（筆名，大村しげ）が最後になっている。なお1963（昭和38）年9月から筆名大村しげとなり，それ以後この名称が名乗られた。

後者の雑誌記事は，1950年代後半から，随筆家として認められるようになるにつ

れて増加し，生涯を通じて執筆された。

執筆やインタビューに応えた雑誌媒体は，月刊の総合雑誌から週刊誌，公的機関の広報誌など多方面にわたる。内容も多岐にわたる。京都の地域情報を中心とした食材や料理に関する内容から，暮らしの折々のしきたりや行事，季節の随想，住まいと住まい方，旅情，もの作り，女性の視点からの生活の知恵や生活批評など，細部へのこだわりを綴っている。1970 年代から 80 年代の頃には，雑誌の思想的な基盤や主張に拘らず，京都の良さを訴えることができる記事ならば，どのような媒体にも応じているといえるほどである。実際に執筆した主な媒体を以下に並べてみよう。これらの中には，連載で執筆したものも少なくない。

総合雑誌などの月刊誌は，執筆した年代順に上げていくと，『主婦と生活』（主婦と生活社），『婦人公論』（中央公論社），『暮らしの設計』（中央公論社），『栄養と料理』（女子栄養大学出版部），『暮しの手帖』（暮しの手帖社），『旅』（日本交通公社），『別冊太陽』（平凡社），『主婦の友』（主婦の友社），『マミール』（佼成出版社），『ミセス』（文化出版局），『るるぶ』（日本交通公社出版事業局），『NHK きょうの料理』（日本放送出版協会），『家庭画報』（家庭画報社），『マダム』（マダム出版社），『奥様クッキング』（主婦の友社），『新しい生活誌ショッピング』（日本経済新聞社），『クロワッサン』（平凡出版），『きものと装い』（主婦の友社），『月刊読売京都ライフ』（読売新聞社大阪本社），『太陽』（平凡社），『婦人生活』（婦人生活社），『婦人くらぶ』（講談社），『家の光』（家の光協会），『別冊暮らしの設計』（中央公論社），『淡交』（淡交社），『家庭画報』（世界文化社）などがある。

週刊誌には，『週刊女性』（主婦と生活社），『若い女性』（講談社），『アサヒグラフ』（朝日新聞社），『女性セブン』（小学館），『週刊朝日』（朝日新聞社），『毎日グラフ』（毎日新聞社），『anan』（マガジンハウス），『サンデー毎日』（毎日新聞社）などがある。

公的機関の広報誌には，『西陣クラブ』（西陣たより社），『市民のまち京都』（京都市広報課），『くらしのアンテナ』（大阪市消費者センター），『けんぽだより』（京都市健康保険組合），『たしかな目』（国民生活センター）などがある。

③ 新聞記事

大村しげは，1950 年代，朝日新聞京都版に投書家・大村重子として，革新的な表情でまず登場する。その後，大村しげという筆名で，秋山十三子・平山千鶴とともに，「おばんざい」を朝日新聞京都版に連載する。1964 ～ 5（昭和 39 ～ 40）年頃には，京言葉を自由にあやつるようになる。この「おばんざい」連載以後，次第に朝日新聞京都版のみならず各新聞に執筆，インタビュー記事も掲載される。執筆の年代順に朝日新聞以外のものを上げてみよう。初出の年月日と記事名を示す。

『京都新聞』（1968.12.29）西陣青年の家の「おばんざいサークル」紹介記事

『毎日新聞』(1975.1.3)「京の正月」
『中日新聞』(1975.5.11)「おふくろの味」
『東京新聞』(1975.5.11)「母の日とおふくろの味」
『京都民報』(1976.9.?)「京の京の大仏つぁん」
『赤旗』(1976.10.17)「日本の味を守ろう――京都府　ゆば――」
『共同通信(北海タイムス・沖縄タイムス・熊本日々新聞・山陽新聞・福井新聞・中国新聞・熊本日日新聞・河北新報・新潟日報)』(1977.12.17)「米飯座談会」
『日本経済新聞』(1980.7.14)「おいでやす祇園さん」
『新婦人しんぶん』(1995.1.1)「元日は寅の刻から」
『しんぶん赤旗』(1997.5.28)「大村しげさんが“絣と更紗”展　東京・中野」

新聞記事は，執筆の最初のきっかけが「おばんざい」となっており，多少の広がりを見せても食べ物に関する内容が多くを占めている。内容は，さらに京都の味や日本人の主食「米飯」に拡大していき，食べ物と大村しげの関わりは一貫したものだった。が，しだいに「わらべうた」や京都の行事について執筆するようになり，最後に登場した『しんぶん赤旗』になると，晩年を過ごしたインドネシア関連記事が現れる。食べ物→京都の暮らし→インドネシアの暮らしへという各新聞の初出記事における内容の変化・拡大は，そのまま大村しげの関心の変化･拡大を示唆している。

なお，これらの新聞記事の切り抜きは厖大なもので，まとめてスクラップブックにファイルされたり，封筒に入れられたりしていたが，ここでは，それらの量については確認していない。

④ 広告誌・機関誌

たべもの関係の業界誌や社内報として，『花のれん』(株式会社産報)，『味の味』(株式会社アイデア)，『季刊銀花』(文化服装学院出版局)，『松籟』(大松株式会社)，『ジャーナル・クック』(大和学園京都調理師専門学校)，『奥様手帖』(味の素株式会社)，『四季の味』(鎌倉書房)，『楽味』(楽味観光社)，『お酢の本』(ミツカン酢)，『COOK』･『デリカ』(千趣会)，『わたしの京都』(出雲屋株式会社) などがある。

その他の社内報や広報誌に，『京のくらし』(京都銀行)，『季刊くらしの泉』(松下電器産業)，『花すみれ』(裝道むらさきの会)，『あけぼの』(聖パウロ女子修道会)，『京都霊園だより　やまびこ』(宗教法人仏舎利苑)，『ふぁいん』(第百生命広報室)，『華道』(華道家元池坊)，『花笑』(ミカレディ株式会社)，『三洋化成ニュース』(三洋化成)，『御堂さん』(本願寺津村別院)，『みどり』(ミドリ十字社)，『はんなりと』(京都全日空ホテル)，『CEL』(大阪ガス)，『月刊自動車労連』(日本自動車産業労働組合連合会)，『おーとくちゅーる　京のそめ』(誂京染振興連合会)，『くらふとぴあ京都』(京都伝統産業青年会)，『ぎをん』(祇園甲部組合)，『山町鉾町』(祇園祭山鉾連合会)，『読書』

（京都市社会教育会館読書友の会）など多数ある。

執筆した媒体の発信地域は，京都を中心に関西圏に及んでいる。執筆を依頼された業種も，食べ物関係に留まらず，染織や伝統産業，銀行や観光などに拡大している。

このほか大村しげは，商品カタログ・チラシ・料理メニューに一文を添えるなど，様々な広告媒体に執筆した。

これらの著作したものから，大村しげのプロフィールと思想の解読のみならず，コレクションに含まれるものについても，多くの情報を得ることができるだろう。

注

1）1952（昭和27）年9月号の『婦人朝日』に掲載された「財産」は，同誌6月号の「特別募集」に投稿して入選したものである。6月号に掲載されたもののほうは，コレクションに含まれる9月号の入選発表ものとは別に，森理恵氏が発掘した資料である。
2）大村しげ「はんなりと京女の思い出箱」（大村 1999）。
3）大村しげの小学校時代の作文については，文集に載せられた以外にも，授業で書かれたと思われるものが1束まとまって，残されている。
4）京都女子専門学校時代の1936（昭和11）年刊の『こだま』には，「麦秋」「トラビヴィヤタ」「水無月」の3篇の詩が掲載されている。
5）こうした執筆に関わるものについては，別に森理恵氏が詳述している。
6）『私の作文』に関する詳細は，森理恵氏の論考を参照されたい。

文　献

大村しげ
1988『京　暮らしの彩り』東京：佼成出版社。
1999『京都・バリ島車椅子往来』東京：中央公論社。
秋山太平・隆平編
1999『私家版　秋山十三子遺稿集』。